『中観心論』第10章における バーヴィヴェーカの一切智者論
――第12-14偈の議論を中心に――

田　村　昌　己

1. はじめに　中観派の学匠バーヴィヴェーカ（Bhāviveka, ca. 490-570）の主著『中観心論』第10章は，全14偈からなる小さな章であり，ブッダの一切智者性を主題とする．一切智者論に関しては，第4章声聞批判（vv. 4-6），第5章瑜伽行派批判（vv. 93-94），第9章ミーマーンサー学派批判（vv. 15-17, 159-167）においても論じられるが[1]，目下の第10章では，ジャイナ教徒を対論者として，主として，「ブッダの無知（非一切智者性）を示していると解釈されうる仏伝中のエピソード」を巡って議論が展開される．仏伝中のブッダの様々な言動を一切智者の問題と絡めて議論するのは，初期経典からなされ，まとまった形では『十住毘婆沙論』に見られる[2]．ところが管見の限りでは，バーヴィヴェーカ以降の，例えば仏教認識論における一切智者論においては見られない[3]．このように思想史的に興味深い『中観心論』第10章ではあるが，一部の先行研究（Hosokawa 1979の英訳，川崎 1992; 2000の和訳と研究）を除いて，これまであまり注目されてこなかった．また，これらの先行研究の理解についても訂正を要する箇所が散見される．そこで本論文では，第10章の内容を概観した上で，特に第12-14偈に着目して考察を試み，その議論を明らかにしたい．

2. 第10章内容概観　第10章は次の偈頌から始まる．なお，現在我々が利用可能なサンスクリット写本では第9章第149偈から第10章第13偈 ab 句までが欠落しているため[4]，チベット語訳とそれに基づく翻訳を提示する．

MHK 10.1［MD40a3-5, MP43a3, TD321a2, TP368a4-5］
gcer bur rgyu bas thub pa la // kun ma bstan* pas kun mkhyen min //
zhes smras khyu mchog sogs ma nges // brjod du med par brjod pa'i phyir //
［*bstan MD, MP, TD; bsten TP.］
ジャイナ教徒（gcer bur rgyu ba, *Nagnāṭa）は牟尼に関して「［主張：］〔牟尼は〕一切智者ではない．［理由：］一切を説いていないから」と述べる．〔しかし，〕リシャバ（khyu mchog, *Ṛṣabha）をはじめとする〔ティールタンカラ〕たち〔によって「一切を説いていないから」というその証因は〕不定〔因〕となる[5]．なぜなら，〔リシャバたちは一切は〕

表現されえないと説いているのだから.

最初のティールタンカラであるリシャバの名が言及されることから，ここでの対論者は明らかにジャイナ教徒である．彼らの推論（[主張：] 牟尼は一切智者ではない．[理由：] 一切を説いていないから）に対し，バーヴィヴェーカは証因が不定因となることを指摘する．彼によれば，ジャイナ教徒が一切智者として認める，リシャバをはじめとするティールタンカラたちも，一切を説いていない．その理由として挙げられる「リシャバたちは一切は表現されえないと説いている」というのは，彼らの多面説（anekāntavāda）を念頭に置いたものであろう．彼らにとって，一切は確定的に表現されえない.

この議論に続いて，冒頭で述べた「ブッダの無知（非一切智者性）を示していると解釈されうる仏伝中のエピソード」を巡る議論が展開される．以下にそれらのエピソードを，注釈書『思択炎』に基づき列挙しよう[6]．『思択炎』では6つのエピソードが追加され，合計15のエピソードが取り上げられる[7].

1. 十四無記を説明しなかったこと【PPr】
2. 輪廻の始まりを知らなかったこと［v. 2］【PPr】
3. スンダリーの殺害を知らなかったこと［vv. 3–4ab］【PPr】
4. ブラーフマナの娘であるチンチャーという美女に誹謗されたこと［vv. 4cd-5ab］【PPr】
5. パータリプトラの都が滅亡する原因を確定的に説明しなかったこと［v. 5cd??］[8]【PPr】
6. 三ヶ月間，馬用の麦を食べたこと
7. 托鉢を空のままで帰ってきたこと［vv. 6–7］
8. デーヴァダッタに投石器で巨石を投げつけられたこと［vv. 9–11］
9. デーヴァダッタが放つ狂象ダナパーラのもとに赴いたこと［v. 8］
10. デーヴァダッタを出家させたこと［vv. 12–13］【PPr】
11. スナクシャトラを従者として抱えていたこと［v. 14］
12. ウドラカ・ラーマプトラ，アーラーダ・カーラーパ，五比丘たちの現況を知らなかったこと
13.『木積喩経』を教示したこと
14. カディラ樹のとげの苦しみという業の果報を受けたこと
15. 他の一切智者を非難したこと

（【PPr】は『般若灯論』でも取り上げられるエピソードであることを示す）

これらに関して，川崎 1992, 193は「ジャイナ教徒が仏陀に対して論難・主張するところに必ずしも限定されるものではなく，仏教内においてもしばしば繰り返され，部派間でも検討が加えられてきた内容である」と指摘する．ジャイナ教徒が実際にこうした批判をしていたのかについては，筆者は現時点で文献的に跡付け

ることができておらず，さらなる調査を要する[9]．

さらに川崎 1992, 194は，バーヴィヴェーカに先行する，上記内容を扱った仏教文献を列挙した上で，『思択炎』（D325a7–b1, P374a8）に直接の言明のある『善巧方便経』（『大宝積経』「大乗方便会」に相当）を取り上げて考察し，「以上からも，『思択炎』所引の一切智批判が『善巧方便経』に依拠し，この経をもとに構成されたものであることを知ることができる」と結論づける．ただしすべてが『善巧方便経』に依拠したものではなく，『大乗十法経』（『大宝積経』「大乗十法会」に相当）や『大般涅槃経』（北本・南本）などに対応する議論が見られるものも存在する．以下ではその一例として，第12–14偈で示される上記11と12を巡る議論を考察することにしたい．

3．エピソード11：スナクシャトラを従者として抱えていたこと　説明の都合上，第14偈のエピソード11「スナクシャトラを従者として抱えていたこと」から考察する．スナクシャトラ（善星比丘，善宿）とは，出家してブッダの従者の一人となり，四禅定を得たものの，増上慢を起こし邪見を抱いて，ブッダの教えに背いたとされる人物である．対論者によれば，やがて教えに背くにもかかわらず従者として抱えていたのは，ブッダの無知を示すものに他ならない．これに対してバーヴィヴェーカは次のように説明する．

MHK 10.14［Ms25a4］
paśyataḥ prātihāryāṇi*1 dharmaṃ cāsy*ā*nu*śṛṇvataḥ*2 /
puṇyopacayam ālokya s*u*nakṣatrasya*3 dhāraṇam //
［*1prāti- L, SG, Ms; prati- K. *2cāsyānuśṛṇvataḥ L; cāsya n［u］śṛṇvataḥ K, cāsya na śṛṇvataḥ SG, Ms. *3su- L, s［u］- K; sva（su?）- SG, sva- Ms.］
MHK 10.14［MD40b3–4, MP43b2–3, TD324a6–7, TP372b7］
cho*1 'phrul dag ni mthong 'gyur zhing // chos ni thos par gyur nas 'di //
bsod nams sog*2 par gzigs gyur nas // rgyu skar bzang po*3 bzhag pa yin //
［*1cho MD, TD, TP; chos MP. *2sog MD; bsog MP, sogs TD, TP. *3po MD, TD, TP; por MP.］
〔出家すれば，〕彼（スナクシャトラ）が〔世尊の〕諸々の奇蹟を見て，〔世尊の〕教えを聴聞し，功徳を積み重ねることになるのを，〔世尊は〕見て取って，スナクシャトラを〔出家を許して従者として〕抱えておられたのである[10]．

この説明によれば，ブッダは「スナクシャトラは従者である間に功徳を積むことができる」と予見したからこそ，やがて教えに背くことになるスナクシャトラを従者として抱えていたのである．『善巧方便経』にはこのスナクシャトラのエピソードは見られないが，『大般涅槃経』「迦葉菩薩品」に対応する議論を見出すこ

とができる．

『大般涅槃経』（北本）「迦葉菩薩品」T12.562c28–563a11：迦葉菩薩白佛言．世尊．如來具足知諸根力，定知善星當斷善根．以何因緣聽其出家．佛言．(1) 善男子．我於往昔初出家時，吾弟難陀，從弟阿難，調婆達多，子羅睺羅，如是等輩皆悉隨我出家修道．我若不聽善星出家，其人次當得紹王位，其力自在當壞佛法．以是因緣我便聽其出家修道．(2) 善男子．善星比丘若不出家亦斷善根，於無量世都無利益．今出家已雖斷善根，能受持戒，供養恭敬耆舊長宿有德之人，修習初禪乃至四禪．是名善因．如是善因能生善法．善法既生能修習道．既修習道當得阿耨多羅三藐三菩提．是故我聽善星出家．（＝『大般涅槃経』（南本）「迦葉菩薩品」T12.809b7–19）

『大般涅槃経』では，スナクシャトラの出家を認めた理由として，(1) 出家をしなければ，スナクシャトラは王位につき，その力で仏法を破壊することになること，(2) 出家をすれば，修行によって四禅定まで獲得したことが後に善因となって，最終的には菩提を獲得させることになること，という二つが挙げられる．バーヴィヴェーカが与える説明はこのうちの理由 (2) に対応していると言えよう．

4．エピソード10：デーヴァダッタを出家させたこと　次に，第12–13偈のエピソード10「デーヴァダッタを出家させたこと」を考察する．スナクシャトラの場合と同様，様々な悪事を働くことになるデーヴァダッタを出家させたのはブッダの無知を示しているという批判である．これに対してバーヴィヴェーカは次のように説明する．

MHK 10.12–13［MD40b2–3, MP43b1–2, TD324a5–6, TP372b5–7］
lhas byin*1 khyim na gnas na ni // ’khor las sgyur ba’i stobs ldan zhing //
’khor dang stobs ni thob gyur nas // bstan pa ’di ni nyams par byed //12//
blo ngan ’di ni rab byung na // nga la ci yang byed mi nus //
de ltar ston pas gzigs nas ni // rab tu byung ba*2 ma bzlog go //13//
［*1lhas byin MP, TP; lhas sbyin MD, lha sbyin TD. *2ba MD, TD, TP; bas MP.］
MHK 10.13cd［Ms25a4］
evaṃ saṃpaśyatā śastrā pravr*a*jan*2 na nivāritaḥ*3 //
［*1evaṃ L,［evaṃ］K(, de ltar Tib.); n.e. SG, Ms. *2pravrajan L; pravraj［yān］K, pravrajen SG, pravrājan Ms. *3na nivāritaḥ K, L, Ms; nānivāritaḥ SG.］
「デーヴァダッタは在家のままであれば，転輪王〔にふさわしい〕力を備え，従者（’khor）と権力（stobs）を獲得して，この〔私の〕教説を妨害する．〔しかし，〕この悪しき心を持つ者が出家したならば，私に対して何もなしえない」[11] と，このように教師は見て取って，〔デーヴァダッタが〕出家するのを禁じなかったのである．

川崎 1992, 69, 124ff. によれば，ブッダが一切智者ではないことの論拠としてデーヴァダッタを出家させたことを持ち出すのは『ミリンダ王の問い』や『十住毘婆沙論』に見られるが，いずれも「デーヴァダッタは出家によって功徳を獲得したこと」を示して批判を回避する（『大般涅槃経』の理由（2）と対応）．一方，目下の『中観心論』では，「デーヴァダッタが（a）在家のままであれば，王の力で教説を妨害することになるが，（b）出家したならば妨害をなすことはできない」と予見したことを出家させた理由として挙げている．これは先に見た『大般涅槃経』におけるスナクシャトラを出家させた理由（1）と対応していると言えよう．なお『善巧方便経』にはデーヴァダッタの出家に関連した記述は見当たらない．

5. おわりに　以上，第10章の内容を概観した上で，特に第12–14偈の議論を考察した．バーヴィヴェーカによれば，ブッダはスナクシャトラやデーヴァダッタが出家後に教えに背くことになるのを知らなかった訳では決してない．そのことを知りながらも，それぞれ意図した目的があって彼らの出家を認めたのである．ブッダが予見した内容や意図した目的については，『大般涅槃経』に見られる，スナクシャトラのエピソードの（大乗的）解釈に対応関係を見出せる．おそらくバーヴィヴェーカは，例えば『十住毘婆沙論』でまとまった形で見られる「仏伝と一切智者の問題」を踏まえつつ，『善巧方便経』や『大般涅槃経』などの大乗経典が与える仏伝解釈を援用しながら，第10章の議論を構成していったのであろう．このことは今後，第10章全体の詳細な考察を通じて，さらなる検討が加えられなければならない．

1）これら3章における一切智者論については，川崎 1992, 139–191を参照．　2）川崎 1992, 61ff. を参照．特に『十住毘婆沙論』の一切智者論に関しては，川崎 1992, 123–136を参照．
3）『中観心論』第10章の議論は，非常に簡潔な形ではあるが『般若灯論』第22章にパラレルな議論が見られ（PPr T30.119a25ff.; D214b6ff., P269a5ff.），それに対してアヴァローキタヴラタ（700年頃）が詳細な注釈を施している（PPrṬ D za 194b7ff., P za 234a7ff.）．またチベットの宗義文献において，ジャイナ教の主張として同章の議論が提示される（志賀 2006を参照）．　4）これらの欠落が存在する事情については川崎 1992, 369–374を参照．
5）先行研究は khyu mchog sogs ma nges を“*Usabha* and others,（however,）are indecisive”（Hosokawa 1979, 50），「リシャバ（Ṛṣabha）等〔が一切智者とされること〕は不確定である」（川崎 1992, 196, 402）と翻訳する．しかしここで指摘されているのは，対論者の証因〈一切を説いていないこと〉の過失である．このことはパラレルな議論がなされる『般若灯論』の記述からも支持される（PPr D215a2–3, P269a8–b2. ただし漢訳には不定因の過失の指摘はない）．　6）『思択炎』が第10章冒頭（TJ D320b5–321a2, P367b6–368a4）で提示する順序に従う．　7）『思択炎』は第4偈 ab 句までは偈頌に対する注釈を与えているが，それ以降は偈頌への注釈は行わず，偈頌の前後に別の「ブッダの無知を示していると解釈

されうる仏伝中のエピソード」を巡る議論を挿入している．このことは『思択炎』の著者問題を考える上でも留意すべきであろう．　8）エピソード5は，『思択炎』第10章冒頭で言及されるものの，それ以降の箇所のどこで議論がなされているのか，一見すると不明である．強いて言えば第5偈 cd 句がそれに相当するのかもしれない（ただし第5偈 cd 句は先行のエピソード3と4のまとめとして理解することが可能）．これについての詳細な検討は今後の課題としたい．　9）『中観心論』自体の文脈としては，先行の第9章最終偈（9.167）における「ブッダの教説とジャイナ教の教説は三ヴェーダを批判する点では等しいが，正しい認識手段であるか否かを巡っては違いがある（＝ジャイナ教の教説は正しい認識手段ではない）」という趣旨の議論を受けて，ジャイナ教側からの反論として提示されるのが第10章の議論である．なお，パラレルな議論が見られる『般若灯論』（とそれに対するアヴァローキタヴラタ注）では，対論者として具体的な学派名は言及されない（PPr T30.119a25; D214b6–7, P269a5）．　10）Hosokawa 1979, 55（チベット語訳からの翻訳）は rgyu skar bzang po（Sunakṣatra）が人物名だと見抜けず，翻訳に混乱をきたしている．また川崎 1992, 203, 403は，b 句後半に関して cāsya nu sṛṇvataḥ という読みを採用していることを差し置いても，文法的にかなり無理のある解釈をしている．　11）Hosokawa 1979, 55と川崎 1992, 202–203, 403は，第12偈の内容をブッダが予見した内容として理解せず，実際の出来事として捉えている．しかし，デーヴァダッタが出家以前にすでにそのような悪事を働いていたという伝承は存在するのだろうか．デーヴァダッタが出家した場合としなかった場合の両方を予見したと理解する方が，この場合は自然であろう．

〈略号表〉

K: Kawasaki's edition of MHK. See 川崎 1992.　**L:** Lindtner's edition of MHK. *Madhyamakahṛdaya of Bhavya*. Ed. Chr. Lindtner. Chennai: The Adyar Library and Research Centre, 2001. **MHK:** *Madhyamakahṛdayakārikā*. Sanskrit: Ms, SG, K, L. Tibetan: D3855（=MD）, P5255（=MP）. **Ms:** Sanskrit manuscript of MHK. 蒋忠新 1991「梵文《思択焔経》抄本影印版・編者的話」『季羨林教授八十華紀記念論文集　上』（江西人民出版社）: 111–117, 511–522.　**PPr:** *Prajñāpradīpa*. T1566; D3853, P5253.　**PPrṬ:** *Prajñāpradīpaṭīkā*. D3859, P5259.　**SG:** Gokhale's copy of Ms. Bahulkar, Shrikant S. 1994. "The *Madhyamaka-Hṛdaya-Kārikā* of Bhāvaviveka: A Photographic Reproduction of Prof. V.V. Gokhale's Copy." *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Saṃbhāṣā* 15: 1–49.　**TJ:** *Tarkajvālā*. D3856（=TD）, P5256（=TP）.

〈参考文献〉

Hosokawa, Hiroshi. 1979. "A Study of the Madhyamakahṛdayavṛttitarkajvālā（Chapters I, II, X, XI）." 『高山短期大学研究紀要』2: 27–77.　**川崎信定 1992**『一切智思想の研究』春秋社.
――― **2000**「善巧方便と智慧――『中観心論』第十章「一切智品」にもとづく考察――」『加藤純章博士還暦記念論集　アビダルマ仏教とインド思想』春秋社，237–250.
志賀浄邦 2006「チベット人の伝えるジャイナ教思想」『人文知の新たな総合に向けて』第四回報告書，京都大学大学院文学研究科，77–108.

（本研究は JSPS 科研費 JP19J01490及び JP21K12839の助成を受けたものである）

〈キーワード〉　バーヴィヴェーカ，ジャイナ教，中観心論，大般涅槃経，一切智者，仏伝

（日本学術振興会特別研究員 PD，博士（文学））